第12回

南国、香南地区
農村婦人のつどい

日本人と米

秋澤潤一氏
（NHK高知放送局放送部長）

『第十二回南国、香南地区農村婦人のつどい』が一月三十日、生活改善グループのメンバーら約二百人の婦人が参加して、市農協会館で開かれました。これは◎農家の良さを生かした暮らしの工夫◎グループ活動の充実と地域振興への参加をテーマに毎年開かれているものです。今年は特に〝米の良さを見直そう〟と、各グループの作った米料理の試食会をはじめ、「日本人と米」と題して秋澤潤一NHK高知放送局放送部長の講演も行われました。今回は、その講演の内容を紹介します。

好評だった米料理の試食会

現在、北海道の旭川市では米がたくさん取れますが、昔は、米は熱帯地方でしか作られていませんでした。また、高知は二期作地帯といわれ、全国でも名の売れた稲作地帯でした。こうした南の方で作られていた米が、どんどん北の方まで作られていき、北海道でも作られるようになりました。このことは、米を作ってきた日本人の伝統であり、米にかける情熱でした。

愛媛県と高知県の境では、米を食べるのは死ぬときだけとか「振り米」といって、竹の筒に米を入れ、それを振って病人に聞かせたそうです。このようなことが昔のことかというと、そうではないのです。

日本人が米を作りだしてから約二千年たちましたが、ほんとうに米を食べられるようになったのは二十～三十年前のことです。おしんのように口減らしのために米一俵で奉公に出されたようなこともありました。

駅弁を食べるとき、私などは、まずふたについている米を一粒一粒食べたものでしたが、最近の人は少々残っていても捨ててしまいます。また、皿鉢料理などもほとんど食べずに捨ててしまいます。もったいないことです。

現在、世界中で四十数億の人がおりますが、ほんとうに腹いっぱい食べているのはその内の三分の一くらいの人で、残りの三分の二の人は、飢えるか飢えないか、ぎりぎりの状態といわれています。

日本人も戦後のどさくさの時期までは、食うか食わずでした。「米をそまつにすると目がつぶれる」ということを聞かれたことがあると思います。このことは、日本人がお互いに米をほんとうに大事にしてきたことを表しています。

今、私たちは米を大切にすることや、もったいないということをどのように考えていけばよいのでしょうか。

私たちの生活のなかには、米とのかかわりが数々あります。姓にしても山田、川田、横田、田中など田の付く人がたくさんいます。また、昔は大工の日当や散髪賃などが米によって払われていたことがありました。このようなことから日本人の生活、経済の重要な部分であることは間違いありません。

去年、米不足といわれましたが現在、日本では米が余る状態です。これは、パンなどの普及によるものですが、そのパンや肉を食べていたアメリカなどでも米の良さが見直されてきています。

日本では以前、一人が一年間に一石（二俵半）くらい食べていましたが、現在では一俵ちょっと、七十六㌔グラムくらいしか食べていません。漬物や梅干しなどのわずかなおかずでご飯を食べていたのが、今は、たくさんのおかずに囲まれ、米が主食という考えが薄れてきたように思われます。

米を作ることは、単に食糧というだけでなく、ほかにもいろいろと役に立っています。例えば、水田に水を蓄えることによって洪水の防止にもなりますし、気温の急激な変化も抑えます。そして、米は長い間作っても地力が衰えず収量も多いのです。このことは、人間を養う力が強いといえます。

現在、機械化や技術の進歩によって、収量も多くなりました。八郎潟ではヘリコプターで種籾をまき、大きな機械で刈り取るなど、大変な省力化もなされています。

国がいろいろな発展を遂げていく基礎になるのは農業です。諸産業の発達、食糧問題を考えていくうえで農業を抜きにしては考えられません。そして、日本の農業の基礎になるのは米だと考えます。

お世話になった校舎に六年生が最後の合奏

長い間ごくろうさま

思い出深い木造校舎とお別れ

◇十市小◇

新校舎への移転を間近にひかえた十市小学校（竹内淳校長、百九十五人）で二月二十四日、両親参観日と旧校舎のお別れ会が開かれました。

両親参観では、父兄が一日先生となって、竹とんぼや缶げったなど昔の遊びを教え、また中国から高知大農学部に留学している鐘鈴鋒さんが、中国と日本との違いなど、質問に答えながら説明しました。

午前十時半からは、児童、父兄、教職員や約三百人が講堂に集まり「旧校舎のお別れ会」。

まず竹内校長が「この校舎で、多くの人が勉強し巣立っていった。その人たちに負けないように、新校舎で勉強し、新しい伝統をつくってほしい」とあいさつ。卒業生の土居与千代さんは「私たちの学んだころは、東の校舎は中学校でした。かわら取りや一寸びなどして遊んだ友達の顔、先生の顔が浮かび上がってきます。どうかときどきでもいいですから、この校舎で習ったこと、遊んだことを思い出してください」と、懐かしい校舎が消えていく寂しさもちょっぴり。

児童会を代表して、六年生の土居英朗君が「ぬくもりある校舎よありがとう。そしてさようなら」と別れを告げ、一年生から六年生まで、「喜びや悲しみを見守ってくれた校舎ありがとう」「長い間ごくろうさま」と、一人一人が感謝の言葉を贈りました。

そして六年生が、お世話になった校舎に最後の合奏を披露し、父兄、子供たちは、それぞれの思い出をかみしめながら、旧校舎に別れを告げました。

手作り人形劇に大喜び

○南子連キャラバン隊○

ユーモラスな人形の動きに子供たちは大喜び

恒例の南国市子ども会連合会（戸田隆会長）によるキャラバン隊が二月二十二日、南と北の二コースに分かれ、市内各小学校を訪問しました。

現在市内には、百二十九単位子ども会が結成され、約三千八百人がそれぞれの地域で活動しています。これら地域子ども会の交流を深め、たくましい子供たちを育てていくために、毎年開かれているもので今年で十五回目。

南コースの最後は、南海学園を訪ずれました。

何といっても子供たちの楽しみは、子ども会のおじさんたちの人形劇で、今年の出し物は「たんこぶ仙人」。

台本から人形まですべて手作りで、一月から練習を重ね、ビデオに撮って手直ししてきたということで、人形操作はバッチリ。ユーモラスな動きに笑いが起こり、子供たちは人形と握手するなど大喜びでした。

明見 市立ゲートボール場完成

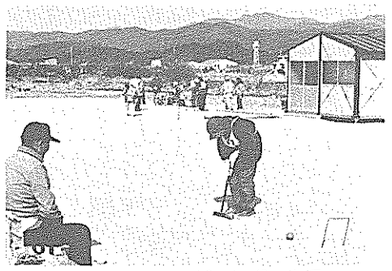
南国バイパスの北、明見地区に市立のゲートボール場が完成、お年寄りたちが楽しく利用しています。

これは、県住宅供給公社が所有している土地の一部（約二千平方㍍）を市が借り受け、ゲートボール場として整備したもの。

過去に、地元としてはこの土地を運動広場にして欲しいとの意見もありましたが実現されず、茅の原となっていました。そこで、市教育委員会では、少しでも市民が利用できる広場に活用したいと、一部を借り受け、県のスポーツ振興の補助金を受け、土入れ整地をし、四面のゲートボール場が完成しました。

コートの横には、ベンチ、便所、物置なども作られ、お年寄りがゆっくりと語らいながら楽しめるようになっています。

利用希望の方は、市民体育館（☎(64)3498）まで連絡してください。


完成した４面のゲートボール場